

令和7年4月28日
農推第1343号

病害虫発生・防除情報メールサービス

大阪府環境農林水産部農政室

目次	ページ
特に発生に注意【ねぎ：ネギアザミウマ(えそ条斑病)、野菜類：アブラムシ類】	1
病害虫の発生予報(5月)	2
野菜【なす、たまねぎ、ねぎ】	3～5
果樹【ぶどう、もも、みかん、いちじく】	6～8
その他注意すべき病害虫【水稻：スクミリンゴガイ、バラ科果樹：クビアカツヤカミキリ】	8～9

特に発生に注意(5月)

ねぎ：ネギアザミウマ(えそ条斑病)



えそ条斑病の葉の病斑



ネギアザミウマ成虫

特徴

- ◆ ネギアザミウマは、高温で少雨の時に多発しやすい。
- ◆ ネギアザミウマは葉を吸汁し、加害部は白く色が抜ける。
- ◆ えそ条斑病は、ネギアザミウマが媒介するIYSV(アイリスイエロースポットウイルス)によるウイルス病である。はじめ、葉身に紡錘型のえそ条斑を呈し、進行すると病斑が癒合拡大し、葉が萎凋・枯死することがある。

防除のポイント

- ◆ ウイルス病に対する治療方法はないので、ウイルスを媒介するネギアザミウマの防除を徹底するとともに、発病株は取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ IYSVは一部の雑草にも感染するので、ほ場内や周囲の除草を徹底する。
- ◆ ネギアザミウマの発生を認めたら、プレオフロアブル、アグリメック(アザミウマ類)、リーフガード顆粒水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

野菜類：アブラムシ類



ワタアブラムシ※

特徴

- ◆ 作物を吸汁し、生育を阻害する。また排泄物にカビが発生し、すす病の原因となる。さらに、各種のウイルスを媒介し、作物によっては致命的な被害をもたらす。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、モスピラン顆粒水溶剤(なす、トマト、ミニトマト、未成熟とうもろこし、しゅんぎくなど)、アドマイヤー顆粒水和剤(なす、トマト、ミニトマトなど)、コルト顆粒水和剤(なす、トマト、ミニトマトなど)、ウララDF(なす、トマト、ミニトマト、ピーマンなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

次回の情報は5月下旬にお知らせします。

農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルを確認してください。

病害虫の発生予報(5月)

作物名	病害虫名	予想発生量(5月)
なす(施設栽培)	すすかび病	平年並
	灰色かび病	平年並
	うどんこ病	平年並
	アザミウマ類	平年並
たまねぎ	べと病	平年並
	ネギアザミウマ	やや少ない
ねぎ	さび病	やや少ない～平年並
	べと病	平年並
	ネギハモグリバエ	平年並
	ネギアザミウマ(えそ条斑病)	やや多い
野菜類	アブラムシ類	やや多い
ぶどう	灰色かび病	平年並
	チャノキイロアザミウマ	平年並
もも	せん孔細菌病	少ない～やや少ない
	シンクイムシ類	平年並
みかん	ミカンハダニ	やや少ない
	ミカンハモグリガ	やや少ない
いちじく	アザミウマ類	やや少ない

※予想発生量は、平年値(概ね過去10年の平均)に比べて、「多い・やや多い・並・やや少ない・少ない」の5段階で示しています。

※ねぎは令和5年度より調査開始のため、過去2年のデータを平年値としています。

※予報の根拠は下記ホームページ内の「病害虫発生予察情報」の該当月をご確認ください。

<https://www.pref.osaka.lg.jp/o120090/nosei/byogaicyu/index.html>

野菜

なす(施設栽培)

すすかび病



葉の病斑

特徴

- ◆ 高温多湿になる施設栽培で発生が多い。

防除のポイント

- ◆ 適度に換気を行い、湿度を下げる。
- ◆ 発生が見込まれる時期にベルコート水和剤、ダコニール1000等を、発生を認めたらスコア顆粒水和剤、パレード20フロアブル等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

灰色かび病



被害果

特徴

- ◆ 咲き終わった花弁や幼果に感染しやすく、20℃程度の多湿な環境条件や過繁茂で発病が多くなる。

防除のポイント

- ◆ 適度に換気を行い、湿度を下げる。
- ◆ 開花後の花弁を取り除く。
- ◆ 発生が見込まれる時期にベルコート水和剤、セイビアーフロアブル20等を、発生を認めたら、ゲッター水和剤、ファンタジスタ顆粒水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

うどんこ病



葉表の病斑



葉裏の病斑

特徴

- ◆ チッソ過多で気温が25～28℃、湿度が50～80%で日照不足が続くと発生する。

防除のポイント

- ◆ 発生が見込まれる時期にベルコート水和剤、フルピカフロアブル等を、発生を認めたらパンチョTF顆粒水和剤、スコア顆粒水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

なす(施設栽培)

アザミウマ類



ミナミキイロアザミウマ成虫※

特徴

- ◆ 苗からの持ち込みにより本ぼでの発生が多くなる。
- ◆ ミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマが果実や葉を加害する。なお、ミカンキイロアザミウマの果実被害は、水なすで目立つ。

防除のポイント

- ◆ 葉の被害に注意し、少発生時の防除を徹底する。
- ◆ 開口部を0.8mm目合いの赤色ネットで被覆し、成虫の侵入を防止する。
- ◆ 雑草はアザミウマ類の生息場所となるため、ほ場内および周辺の除草を徹底する。
- ◆ 発生を認めたら、モベントフロアブル、ファインセーブフロアブル等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

たまねぎ

べと病



二次感染株の症状

特徴

- ◆ 好適条件(気温15℃前後で多雨)が揃うと急速にまん延する恐れがあることから、予防散布が重要である。
- ◆ 多発する年には4月上旬ごろより発生が見られるため注意する。

防除のポイント

- ◆ 発病株は、次年度の感染源となるため、ほ場外へ持ち出し、適切に処分する。
- ◆ 発生が見込まれる時期に、ジマンダイセン／ペンコゼブ水和剤、ダコニール1000等を、発生を認めたら、ベトファイター顆粒水和剤、リドミルゴールドMZ等を散布する。

ネギアザミウマ(えそ条斑病)



ネギアザミウマ成虫

特徴

- ◆ ネギアザミウマは、高温で少雨の時に多発しやすい。
- ◆ ネギアザミウマは葉を吸汁し、加害部は白く色が抜ける。
- ◆ えそ条斑病は、ネギアザミウマが媒介するIYSV(アイリスイエロースポットウイルス)によるウイルス病である。はじめ、葉身に紡錘型のえそ条斑を呈し、進行すると病斑が癒合拡大し、葉が萎凋・枯死することがある。

防除のポイント

- ◆ ウイルス病に対する治療方法はないので、ウイルスを媒介するネギアザミウマの防除を徹底するとともに、発病株は取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ IYSVは一部の雑草にも感染するので、ほ場内や周囲の除草を徹底する。
- ◆ ネギアザミウマの発生を認めたら、グレーシア乳剤(鱗茎類 アザミウマ類)、モスピラン顆粒水溶剤(アザミウマ類)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。



えそ条斑病※

※原図：(地独)大阪府立環境農林水産総合研究所
 *原図：大阪府園芸植物病害虫図鑑(大阪府植物防疫協会)
 無断転載を禁ずる。

病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。
<https://www.pref.osaka.lg.jp/o120090/nosei/byogaicvyu/index.html>
 農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。

ねぎ

さび病



葉の病斑

特徴

- ◆ 葉面にオレンジ色のやや隆起した小斑点が多数できる。
- ◆ 多発すると被害葉が枯死する。
- ◆ 気温が22℃ぐらいで雨の多いときに発生が多い。
- ◆ 肥料切れした畑で発生が多い。

防除のポイント

- ◆ 菌は被害植物上で越冬するので、発病株は取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ 発生前から、アミスター20フロアブル、ラリー水和剤、パレード20フロアブル等を予防的に散布する。

べと病



べと病の症状

特徴

- ◆ ベと病は好適条件(気温15℃前後で多雨)が揃うと急速にまん延する恐れがあることから、予防散布が重要である。

防除のポイント

- ◆ 発病株は、次年度の感染源となるため、ほ場外へ持ち出し、適切に処分する。
- ◆ 発生が見込まれる時期に、ダコニール1000、ジマンダイセン／ペンコゼブ水和剤等を、発生を認めたら、ベトファイター顆粒水和剤、リドミルゴールドMZ等を散布する。

ネギハモグリバエ



葉の食害痕(新系統)

特徴

- ◆ 葉の内部を幼虫が食い込み、その痕が細長く白い筋になる。
- ◆ 新系統が発見されており、従来に比べて一葉あたりの幼虫数が多く、集中的に葉肉を食害するため、葉が白化したようになる。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、グレーシア乳剤、アフーム乳剤等により、発生初期の防除を徹底する。



▲新系統について詳しくはこちら

果樹

ぶどう

灰色かび病



花がらでの症状

特徴

- ◆ 多湿条件で発生が多くなる。
- ◆ 胞子が雨や風によって飛散し、傷口等から感染する。

防除のポイント

- ◆ 適切に換気を行い、湿度を下げるようにする。
- ◆ 第1回ジベレリン処理から結実始めの間にビニールでマルチングをする。
- ◆ 花がらが発生源となることが多いので、開花後に花がらを取り除く。
- ◆ 発生を認めたら、被害花穂・被害葉を速やかに取り除き、オンリーワンフロアブル、ゲッター水和剤等を散布する。

チャノキイロアザミウマ



被害果*

特徴

- ◆ 巨峰、シャインマスカット等の大粒系品種で被害が大きくなりやすい。

防除のポイント

- ◆ モスピラン顆粒水溶剤、コルト顆粒水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

もも

せん孔細菌病



春型枝病斑



葉の病斑

特徴

- ◆ 春になると越冬した病原菌が増殖し、春型枝病斑(スプリングキャンカー)を生じる。
- ◆ 病原細菌は、雨水に混じって分散し、気孔や傷口から感染する。

防除のポイント

- ◆ 発生が見込まれる時期に、バリダシン液剤5、スターナ水和剤等を散布する。
- ◆ 春型枝病斑を見つけたら、落花期までに切り取ってほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 風当たりの強いほ場では防風ネットを設置する。

もも

シンクイムシ類



被害果

特徴

- ◆ ももの果実に食入するシンクイムシ類は、ナシヒメシンクイ、モモシンクイガ、モモノゴマダラノメイガがある。

防除のポイント

- ◆ 被害枝は除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 産卵期から幼虫加害期(5月上旬～7月下旬)にモスピラン顆粒水溶液、アディオン乳剤等を散布する。

みかん

ミカンハダニ



被害葉

特徴

- ◆ 梅雨明け後に発生が多くなる。

防除のポイント

- ◆ 6月中～下旬に、ハーベストオイル(かんきつ)、スプレーオイル(かんきつ ハダニ類)等のマシン油剤を散布する。
- ◆ 発生を認めたら、スターマイトプラスフロアブル(かんきつ)、マイトコーネフロアブル(かんきつ)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。
- ◆ 薬剤を散布する場合は、葉裏にも薬液がかかるように散布する。

ミカンハモグリガ



被害葉(葉裏)

特徴

- ◆ 夏・秋期に発生が多く、幼木に被害が多い。
- ◆ 発生が多いと、かいよう病を誘発する。

防除のポイント

- ◆ 新梢、新葉を中心に散布すると効果的である。
- ◆ 発生を認めたら、アディオン乳剤(かんきつ)、ダントツ水溶剤(かんきつ)等を散布する。
- ◆ アディオン乳剤は、散布後にハダニ類が発生しやすいので注意する。

いちじく

アザミウマ類



被害果

特徴

- ◆ 主にネギアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ、ハナアザミウマ等がいちじくを加害する。
- ◆ 果実の横径が2.5～3.0cmの頃から2週間程度の間に侵入する。
- ◆ 果実内に侵入し食害する。食害された果実は内部が変色する。

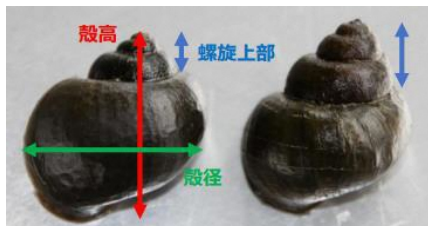
防除のポイント

- ◆ 成虫発生期(5月下～6月中旬)にディアナWDG、アディオオン乳剤等を散布する。
- ◆ ほ場の周囲を0.8mm目合いの赤色ネットで覆い、成虫の侵入を抑える。
- ◆ 乱反射型光拡散シートをマルチとして設置し、成虫の侵入を抑える。

その他 注意すべき病害虫

水稲

スクミリンゴガイ(ジャンボタニシ)

スクミリンゴガイ
(ジャンボタニシ)

スクミリンゴガイ

マルタニシ



ヒメタニシ

注)当該項目「スクミリンゴガイ(ジャンボタニシ)」の写真は、農林水産省リーフレット「ジャンボタニシによる水稲の被害を防ぐために」より引用。

特徴

- ◆ 成貝の殻高は2～7cm程度。
- ◆ 他のタニシ類に比較して、螺旋上部の長さが短く、殻径と殻高がほぼ同じである(上部写真参考)。
- ◆ 主に田植え直後(約20日後まで)の苗が食害され、欠株になる。

防除のポイント

- ◆ 水深4cm以下では自由に移動できないので、田植え後の浅水管理が有効。
- ◆ ほ場が凸凹の場合、深いところの稲が食害されるため、代かきをきちんと行い、ほ場を平らにする。
- ◆ 用水路からの侵入を防ぐため、取水口や排水口に金網(編目5mm以下)を設置する。
- ◆ 田植え直後にスクミノン、スクミンバイト3、ジャンボたにしくん等を散布する。

注)スクミノン、ジャンボたにしくんを使用後は7日間湛水状態にし、かけ流しや落水はしない。



卵塊

下記ページ内の農林水産省・安全局植物防疫課「スクミリンゴガイ防除対策マニュアル(移植栽培)」をご参照ください。
<https://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/gaicyu/siryou2/sukumi/sukumi.html>

果樹

バラ科果樹(もも、すもも、うめ等のサクラ属)

クビアカツヤカミキリ



フラス

成虫



幼虫

防除のポイント

- ◆ 幼虫は樹体内を食害し、4月～10月頃にフラス(幼虫の糞・木くず・樹脂の混合物で中華麺～うどん状に固まる)を排出する。6～8月に成虫が羽化する。
- ◆ フラスの発生を見逃さないようにほ場をよく見回る。
- ◆ フラスが見られたら、千枚通しや針金等でフラスをかき出してからロビンフッド(もも、すもも、うめなど)、ベニカカミキリムシエアゾール(もも、すもも、うめなど)を注入するか、幼虫を突き刺して殺虫する。
- ◆ 成虫が発生する前の5月下旬までに4mm目合いネットを2重、もしくは0.4mm目合いネットを1重に樹幹に巻き付け、羽化して樹から脱出した成虫を閉じ込め、他の樹への分散を防ぐ。

「クビアカツヤカミキリの生態と防除対策(R7.3改訂版)」もご参照ください。

https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/kubiaka_osaka.pdf